

建物配置図にみる慈恵医大の歴史

—— 関東大震災で灰燼に帰すまで ——

次頁の図は関東大震災（大正 12 年（1923）9 月 1 日）前の慈恵医大の建物配置図である。大学に昇格したばかりの、しかも大震災で灰燼に帰す寸前（大正 11 年 10 月現在）の情景である。高木兼寛が病院や医学校の建設を構想してから、40 年かけて 1 つひとつの建物を増改築して、漸く初期の目的であった大学に昇格した（大正 10 年 10 月）ばかりであった（その意味で、あまり知られていないが、大変貴重な図である）。当時の建物のうち焼失をまぬがれ現存するのは図中 15 の御大典記念館のみである。

高木兼寛が 5 年の英国留学を終えて海軍医務局に復帰したとき（明治 13 年暮）、彼にはぜひ成し遂げたい仕事があった。それは自分の理想とする病院と医学校をつくることであった。病院、医学校といっても彼の意図したのは、英国で在学したセント・トーマス病院医学校のような、患者を中心に考える患者のための医療施設であった。そこには、“まず貧しい患者があり、それを救済する病院（慈善病院）があり、そしてそれを支える付属医学校がある”といった英国流の現実的医療思想があった。

兼寛は英方医・松山棟庵と語り合い、松山を中心とする医師団と兼寛の海軍軍医団とから先ず医学研究会（成医会）を結成し、この成医会会員の協力のもとに彼の思想を具体化していった。帰国の翌明治 14 年（1881）初春にはもう慈善病院（有志共立東京病院）と医学校（成医会講習所）の建設を計画し、その準備に移っている。

兼寛は関東大震災のわずか 2 年前に逝去しているから、この配置図に至るまでの 40 年間の建物史は彼の医療思想をほぼ忠実に具体化していったものとみることができる。

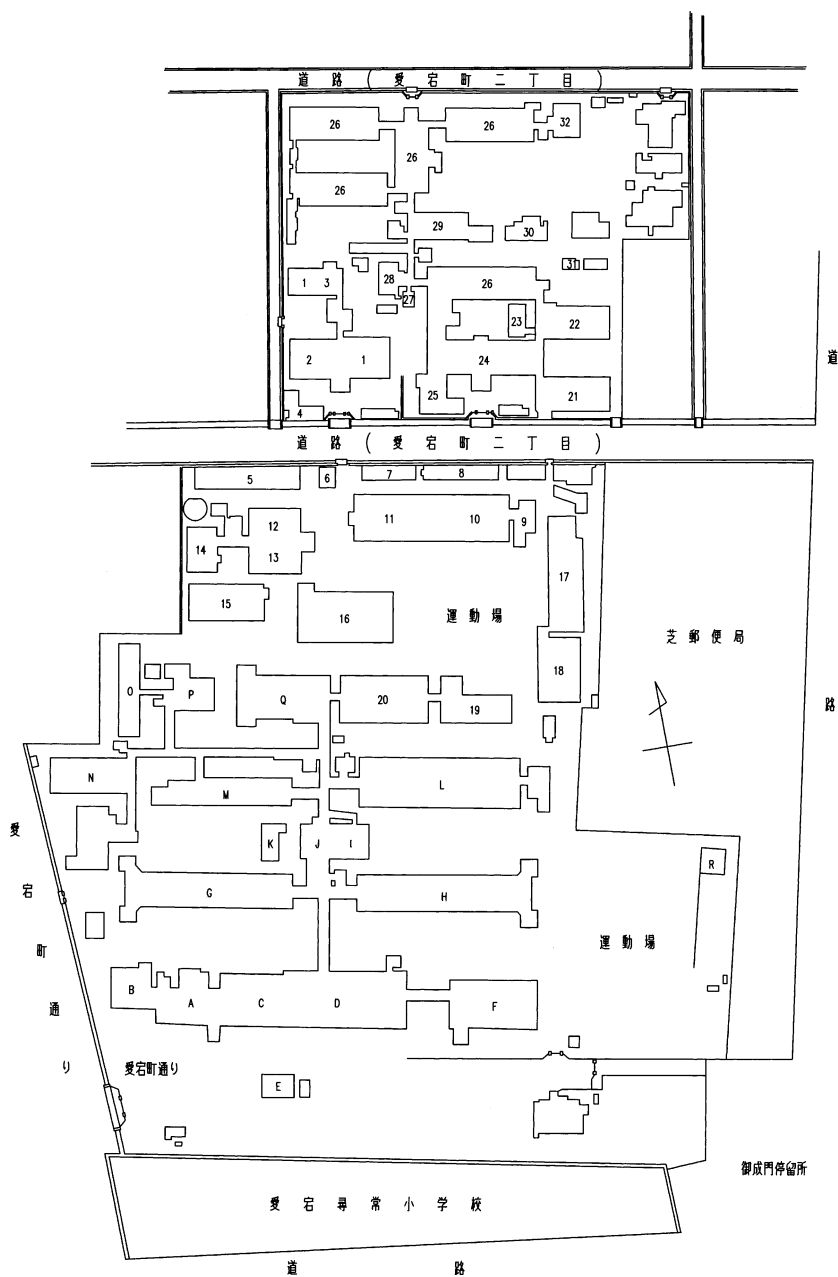


図1. 東京慈恵会医科大学及附属東京病院並東京慈恵会医院配置図

東京慈恵会敷地総坪数 11,080 坪 94

東京慈恵会医科大学

位置 芝区愛宕町 2 丁目 13,14 番地

建坪 1,028 坪 5

同 付属東京病院

位置 芝区愛宕町 2 丁目 14 番地

建坪 970 坪 5

東京慈恵会医院

位置 芝区愛宕町 2 丁目 8,9,10 番地

建坪 1,596 坪 5

東京慈恵会医科大学及付属東京病院

- 1 講義室
- 2 事務室
- 3 動物教室（はじめ病理解剖実習室）
- 4 成医会事務室
- 5 生理学教室
- 6 動力室
- 7 図書庫
- 8 食堂
- 9 組織学準備室
- 10 物理・化学教室，組織学実習室
- 11 講義室
- 12 病理学・細菌学実習室，病理学教室（2 階）
- 13 講義室，細菌学教室（2 階）
- 14 病理解剖室
- 15 御大典記念館，図書部（1 階），病理標本室（2 階），解剖標本室（3 階）
- 16 医化学実習室，組織学実習室，大講堂（2 階）
- 17 雨天体操場
- 18 解剖学教室，講義室（2 階）

- 19 動物室
- 20 研究所
- 21 診察所，病室（2 階），看護婦室（3 階）
- 22 病室（1 階）（2 階），看護婦室（3 階）
- 23 薬局
- 24 診察所，病室（2 階）
- 25 手術室
- 26 病室（1 階）（2 階）
- 27 検尿室
- 28 食堂，当直医室（2 階）（3 階）
- 29 賄所
- 30 機械室
- 31 製薬室
- 32 消毒室

東京慈恵会医院

- A 事務室，当直室（2 階）
- B 賄所
- C 薬局
- D 外来診察所
- E 説教所
- F 会場，便殿（2 階）
- G 第 1 号病棟
- H 第 2 号病棟
- I 臨床講義室
- J 消毒室
- K 機械室
- L 第 3 号病棟
- M 第 4 号病棟
- N 看護婦寄宿舎
- O 看護婦寄宿舎
- P 看護婦教育所
- Q 手術室，X 光線室，機械室，教授室（2 階）
- R 弓術場

大正 11 年 10 月製図印刷

1. 有志共立東京病院、芝愛宕町に開院

兼寛ははじめ、すでに閉鎖することになっていた東京府立病院を譲り受け、ここに有志共立東京病院（Tokyo Charity Hospital）を開院する予定にしていた。しかし運悪くその頃コレラの大流行があり、東京府はこの病院を一時隔離病院に当てることにしたため、やむなく芝の天光院（寺院）の家屋を借りて、しばらくここで診療することにした（明治15年8月）。

幸い、コレラの流行もようやく治まり、府立病院は予定通り払い下げられることになったので、これを改築、修繕して、有志共立東京病院は、明治16年（1883）9月、天光院からここに引っ越した。現在の慈恵医大の敷地、港区西新橋3-25-8である。

兼寛は、まず有栖川宮威仁親王の病院総裁のご承諾を機に、明治17年4月、病院開院式をこの場所で盛大に挙行了。当日は威仁親王のほか、各参議、元老院議員、各国公使、さらに東京府知事、内務省衛生局長ら多数の来賓が列席して、厳粛にして華麗な式典が挙行された。当時はこのような式典が珍しかったせいもあって、多くの一般群集も見物に押し寄せ、警官が整理にあらねばならないほどの大盛況になった。

府立病院を改築して引っ越した当時の建物のうち、この配置図ができた大正11年（1922）まで生き残ったのは図中A（事務室・当直室（2階））、B（賄所）、C（薬局）、D（外来診察所）の計490坪のみである（写真1）。引っ越した当時の総建坪数は868坪であったというから、この建物のほかに、400坪に近い総建坪数の建物が散在していたことになる。散在していた建物の中には入院用の病棟（ベッド数20-30）もあったはずであるが、今となっては推測する資料もない。この図のA、B、C、Dの北側に見られる多くの建物はすべてその後新築されたものであるから、古い建物は次々解体されながら新しい建物に置き換わっていったものと考えられる。

図中D（外来診察所）（写真1.中）には、はじめ内科、外科の診察室のみがあり、内科は松山棟庵ら3名が、外科は高木兼寛ら3名が担当していたが、そ



写真1. 有志共立東京病院の外来棟（A, B, C, D）。
上：受付玄関から診察所をみる。
中：診察所。向こうに見える玄関と屋根は便殿（F）。
下：便殿（皇后陛下のお休み所）の玄関。

の後、婦人科、眼科、耳鼻咽喉科の診察室が新たに設けられた。婦人科の診察室は恐らく米国で学び、明治22年にこの病院の婦人科主任に招かれたドクター岡見京子のための診察室だったと思われる。また眼科の診察室は明治24年に眼科の主任に委嘱された宮下俊吉のための診察室だったのではなかろうか。さらに耳鼻咽喉科の診察室は明治25年に日本で初めて耳鼻咽喉科を創設した金杉英五郎のための診察室であったと思われる。

図中Eの説教所というのは、少し古い配置図(明治42年版)には見られないし、また慈恵医大85年史には「大正3年11月より高木院長は外来患者を院庭に集め、布教師の講話を聞かせることを始めた」とあるから、そのころ造られたものではないだろうか。「患者にとっては身体の療養ばかりでなく、心のケアもおとらず大切である」というのが兼寛の元来の主張であった。病気にたいする恐怖、悲嘆など精神的苦痛をもつ患者や宗教的不安を背負う患者が少なくなかったのであろう。

F(会場、便殿(2階))の便殿というのは皇族など高貴な方の休息所のことであるが、この場合は皇后陛下(後の昭憲皇太后)のために作られた休息所である。この建物は明治42年の配置図には見られるが、それ以前の(明治36年の)配置図には見られず、代わりにD(外来診察所)の東端に便殿という1室があるので、恐らくこの建物Fは(東京慈恵会がつくられた)明治40年ころ新築されたものと考えられる。皇后は明治20年から昭和18年まで(56年間)毎年この病院を行啓されたが、このF(写真1.下)が新築されるまでは恐らくDの便殿が使われていたものと推測される。Fは2階建てで、2階に便殿、1階に(慈恵会の?)会場、事務室、理事室などがあつた。

岡見京子は明治22年にペンシルベニア女子医科大学を卒業した洋行帰りの女医第1号である。彼女は兼寛院長によって、上述のように新設された婦人科の主任として抜擢、招聘されたのであるが、しかしそれから僅か3年ばかりで、この恵まれた地位を去っている。その理由は、この病院に皇后が行啓されたとき、彼女が女性であるという理由で、拝謁を遠慮せよという宮内省からの内示があつたからであつた。当時としてはこのようなことは常識であつたが、アメリ

カ仕込みの、しかも自尊心の強い彼女としてはとうてい忍従することができなかった。当時の封建思想のもとでは、たとえ欧米の一流の大学をでた立派な医師であっても、それが女性であれば皇后に拝調する資格はなかったのである。

2. 有志共立東京病院は東京慈恵医院に改組し、施設拡充

有志共立東京病院は、その名の示す通り、有志（医師、実業家ら）の醵金で設立、運営されてきたが、その醵金活動には限度があり、やがて華族や政治家の夫人たちの「婦人慈善会」がそれに代わってこの病院の経済援助を行うことになった。その活動の1つが鹿鳴館での慈善バザーであった。2度にわたる慈善バザーの収益金は病院に寄付され、それを受けた病院は看護婦教育所（図中 P）の建設に充当した（明治 19 年（1886）1 月）。それは煉瓦造りのしょうしゃな建物であった（写真 2）。数年後には看護婦寄宿舍（N, O）も建設された。わが国最初の看護学校である。

慈善病院の宿命で、患者が増えれば増えるほど経営は苦しくなり、やがて



写真 2. 有志共立東京病院 看護婦教育所（P）。

東南方向から写す。後に東側に手術室の建物（Q）ができたため東側にあった渡り廊下と入口は図 1 のように南側に移された。

婦人慈善会の支援では不足がちになってきた。そのため、兼寛は皇后陛下に病院の総裁になっていただき、皇后からのご下賜金によって運営できないものかと考えた。この考えは兼寛が英国で学んだ英国王室と慈善病院の関係であった。

この願望は現実となり、病院は改組され、その名も東京慈恵医院と改称された（明治20年4月）。それ以後、病院は総裁になられた皇后のご下賜金によって支援されることになったのである。

数次にわたるご下賜金によって、府立病院に由来する老朽化のはげしい建



写真3. 東京慈恵医院 第2号病棟（H）。

上：全景 東南側から写す。

下：構造はワンルーム形式。中央のテーブルはナースステーション。

物は次々と新しい建物に造り替えられていった。そして明治24,5年ころには、次のような新築の病棟が並んでいたと考えられる。図中G(第1号病棟(130坪, 明治19年5月設立)), H(第2号病棟(130坪, 明治23年3月設立)), L(第3号病棟(167坪, 明治22年5月設立))などである。これでベッド数は120以上に急増したはずである。さらに遅れて、明治42年7月に、M(第4号病棟)が増設された。

このうち最も興味深いのは煉瓦造り2階建てのG(第1号病棟)とこれと対称的なH(第2号病棟, 写真3)である。それは兼寛が留学したセント・トーマス病院のナイチンゲール病棟をモデルにして造られたものであった。構造の特徴は写真3. 下のようなワンルーム形式である。天井は高く、広い床には左右1列に15床ずつのベッドが並び、1ベッドに1つずつの上下に長い窓が配置してあった。ベッドの間もゆったりとしていて、とくに左右1列に並んだベッドとベッドの間の広い空間にはナースステーションが置かれていた(当時は「中の台」とよばれた)。また入口のすぐ近くには婦長専用の居住室があった。

一見してすべての状況が把握できる機能性がこの病棟の特徴であった。患者と看護婦がおたがいの存在をいつも確認できる位置にあり、とくにナースステーションに近いベッドには重症患者を集めるため、患者の精神はずっと



写真4. 東京慈恵医院 第4号病棟(M)の内部。
畳の大部屋であり、中央が通路になっている。

安静に保たれる。婦長は病棟の居住室の小窓から病棟全体の様子をつねに把握することができる。要するにここには構造的にも機能的にも「徹底した患者中心の病室」をつくろうとしたナイチンゲールの精神がよく生かされていた。

L（第3号病棟）とM（第4号病棟）の構造は、このG、H（第1号病棟、第2号病棟）とは異なり、写真4のように畳の上に布団を敷く形式であった。当時のことだから畳の上の病床生活を希望する患者も多かったのではなかろうか。

明治44年当時のベッド数は140-180見当であったと推測される。

看護婦寄宿舎ができたころは、西隣りの青松寺のまわりには、愛宕山を背にした数寺が並んでおり、一帯はまだ雑木林の状態であつたらしい。そしてそこに野生の狸が生息していたという。しかもその狸が慈恵病院の構内に出没して看護婦をだまして困ったという話が残っている（看護婦の手記）。

看護婦が病棟の仕事を終わって、夜おそく寄宿舎に向っていると、うしろから患者のうめき声が聞こえてくる、何事が起きたのかと病室に帰ってみると、何事も起きていない。何かの聞きちがいかと思ひ直して、また寄宿舎に向うと、またうめき声が聞こえてくる、帰ってみるとまた何事もない。こんなことを繰り返して、やっとこれが狸にだまされていたことに気がついたという。これが1人だけでなく、多くの看護婦が体験していたというのである。

この手記を読んで、とくに興味深かったのは、当時の看護婦の多くが「狸は本当に人をだます」と信じていたらしいことであつた。

3. 成医会講習所は流浪ののち東京慈恵医院構内に転居、その名も東京慈恵医院医学校に

兼寛、松山棟庵らは、明治14年（1881）5月、成医会講習所（Sei-I-Kai Medical School）という医学校を設立し、京橋区檜屋町の東京医学会社の大

広間で開校した。東京医学会社とは松山が関係する医学研究のクラブであった(普通の意味の会社ではない)。教員としては兼寛、松山らのほか、多くの若い海軍軍医が参加していた(ほとんど無給奉仕であった)。

東京医学会社は間もなく解散したため、講習所としては何処かに住まいを探さねばならず、さし当たっては有志共立東京病院が仮住まいしていた天光院にしばらく同居することにした(明治15年9月から2ヶ月)。しかしこれから後も放浪はつづいた。まず兼寛が校長をしていた海軍医務局学舎(軍医学校)に引越し、それから後は医務局学舎が引越しするたびに、それと行動をとともにした。明治15年11月から4年間は芝山内天神谷で、次の3年間の同22年12月までは芝山内御成門で同居、共生した。医学会社をでてから実に7年3ヶ月の放浪であった。

この間に、兼寛の医学校についての考えもようやくまとまり、講習所の名前を成医学校と改めて芝愛宕町の有志共立東京病院(当時は東京慈恵医院)の構内に引っ越した(明治23年(1890)1月)。幸い東京慈恵医院はすでに皇后陛下のご支援によって、その運営はうまく軌道に乗っていたので(上述)、成医学校はこの病院の附属医学校というかたちにしたのである。そして校名も東京慈恵医院医学校(Tokyo Charity Hospital Medical School)と改められた(明治24年4月)。これで兼寛がかつて英国で学んだセント・トーマス病院医学校(St. Thomas's Hospital Medical School)と同じかたちになったわけである。これが兼寛の理想のかたちであった。

東京慈恵医院医学校は当時改築中の海軍病院の古建材をもらいうけ、一部これをつかって校舎を建築した(明治23年1月)。最初につくられたのが図中8(食堂)、9(組織学準備室)、10(物理・化学教室、組織学実習室)、11(講義室)であった。さらにこれに続いて新校舎の工事が進められ明治24年2月に完成した。新校舎は愛宕町2丁目(現在の附属病院のA棟西側とB棟をふくむ位置。三菱から借り受けた360坪)に、道路を隔てて、前年完成した校舎(図中8,9,10,11)に相対してつくられた。すなわち1(講義室)、2(事務室)、3(動物教室、はじめ病理解剖実習室)をふくむ建物である。ここにはじめて独立の学校としての形態を備えることができたわけである。本学発展



写真 5. 東京慈恵医院医学校 校舎 (1, 2, 3).

上: 道路側 (南側) から写す. 門 (北門) に立つのは兼寛校長.

中: 玄関.

下: 図書閲覧室.



写真 6. 東京慈恵医院医学校 校舎 (9, 10, 11).
上：西側から写す。
下：窓側の組織学実習室。



写真7. 東京慈恵医院医学校 食堂 (8).

史上画期的出来事であった。

写真5. 上はその新校舎（の前棟）を道路側（南側）から写したものである。1階右（東側）は図書室，左（西側）は事務室，2階の左右に2つの講義室があった。後棟には1階に病理解剖室，2階に病理実習室があった（この病理学関係の室は，明治44年に新しい病理学関係の建物ができたとき，動物学関係の室に変わった）。

写真6. 上は，9（組織学準備室），10（物理・化学教室，組織学実習室），11（講義室）をふくむ建物を西側から撮ったものである。これの南北の両窓際には顕微鏡を並べて組織を観察する，東西に細長い部屋があり（写真6. 下），その内側に物理・化学教室，講義室があった。8（食堂）は写真7のように小さいものであるが，1学年20人未満の全体4学年の学生数ではこのぐらいの大きさで十分だったのかも知れない。

成医会講習所が放浪していた頃（明治15-23年）の女子学生に本多せん子がいる。彼女は明治19年に前期医術開業試験に合格し，同23年に同後期試験に合格した慈恵出身の最初の女医である（日本全

体で女医第4号)。

ところで放浪時代の成医会講習所の教育施設はあまり整っていなかったらしく、彼女の次のような回想が残っている。「そのころの女医学生は、男の学生に圧迫されて、解剖の標本なども十分に見ることができないため、夜ひそかに提灯をつけて高輪の泉岳寺墓地に行き、あそこで頭蓋骨を1つ、こちらで大腿骨を1つと、拾いあつめて持ち帰り、勉強しました」と。

しかし、矛盾するようだが同じ放浪時代(海軍医務局学舎共生時代)に、兼寛は人体解剖を日本ではじめて学生にやらせている(明治15年12月)。場所は病院敷地の北東隅に設けられた一棟であったという。

4. 東京慈恵医院医学校は医学専門学校に昇格

東京慈恵医院医学校は明治36年(1903)6月、医学専門学校に昇格し、以後卒業生は医術開業試験を受けることなく開業免許が授与されることになった(明治38年10月)。それ以前は卒業しただけでは免許は与えられず(医師になれず)、開業試験に合格せねばならなかったのである。

兼寛はこの専門学校昇格を機に、彼の理想とする教育を始めようと決意した。彼の理想は、医学的力量を十分もちながら、しかも病者の痛みが分かる、人間味ゆたかな医師を育てることであった。それまでの医学校時代は、学校での教育は開業試験を受けるためであり、開業試験に合格しさえすれば、卒業する必要はなかったのである。そのため学校のカリキュラムはあまり重視されることはなく、したがって兼寛の教育方針も徹底することは困難だったのである。

兼寛は、医学教育の基本は、あくまでもその医学の基礎的側面の教育と人間性の教育(人がら教育)にあると信じていた(臨床経験は生涯かけて獲得するものである)。この頃から彼はまず基礎医学研究室、実習室、講義室の充実に努力しはじめた。明治38年10月、5(生理学教室)、7(図書館)、4(成



写真 8. 東京慈恵医院医学専門学校 生理学教室 (5).
ここで行われる生理学実習。

医会事務所)を同時に新築した。この5(生理学教室)は木造平屋建ての小さいものであったが、大変能率的であったといわれる。教授は生沼曹六であった。永山武美(当時生理学助手)の回想によると「計算してみますと大体50坪か60坪に足りない、動物の部屋まで入れてそんなものです。細長い平屋建ての木造でありまして、非常に小さいけれどよく考えられていて機能的、効率的である。全体が生理実験室(15坪)と化学実験室(7坪半)に分かれていて、その中間に化学天秤、図書、機械があり、化学実験室寄りに1坪半ぐらいの暗室がありました。化学実験室には排気室(ドラフト)やガラス細工の場所もありました。実験台は甲板一寸ばかりの厚さのケヤキ造りの立派なものでした」と言っている(写真8)。

7(図書館)と4(成医会事務所)は同じ運命をたどって、一緒にここに引越してきたものである。成医会は、その結成間もない明治18年に、成医会文庫(図書館)を京橋区新貳町(現・銀座3丁目)に開館して一般医師に奉仕していた(図書は、会員その他からの寄付で買い求められた和医書1,500冊、洋医書2,000冊、洋雑誌900冊であった)。そして成医会の事務、会合(例会、総会)もそこで行われていた。しかしどうした訳か、文庫の運営が次第に困難になり、20年後の明治38年に、この東京慈恵医院の構内に引越すこ



写真 9. 東京慈恵医院医学専門学校 図書館 (7).

とになったのである。図書は7のレンガ造りの図書館(2×8間)に保存され、成医会本部の方はその北側の医学校構内の4の新築家屋に引っ越して、そこで成医会の事務、会合が行われることになった(この図書館は現在の図書館の前身の一つになった)(写真9)。

翌明治39年、運動場の東側端に雨天体操場(17)が新設された(写真10.上)。これは体操場として使用されたばかりでなく、卒業式、記念式などにも使われ、その効用は大きかった。兼寛はそこ、明徳会なる学生の手精神修養講座を開き、毎月宗教家、文化人を招いて講演を聴くことにしていたが、その講演会場としても使用された(写真10.中)。すなわちここは人間教育の場にもなったのである。

これに続いて明治40年には、体操場の南に、南北10間、東西6間の木造2階建ての18(解剖学教室、講義室(2階))が造られた(写真10.上)。2階には講義室のほか標本室、教授室、階下には解剖学実習室、死体室などがあった。教授は新井春次郎であった。

明治36年、慈恵医学校が医学専門学校に昇格したとき、その申請から認可までの期間がわずか14日であったことについて、医史学者・酒井シヅ氏はこう述べている。「他の医学校の昇格が容易でな



写真 10. 雨天体操場 (17) と解剖学教室 (18).

上：西側から写した雨天体操場 (左の平屋建) と解剖学教室 (右).

中：雨天体操場で行われる明徳会. 合掌から始まった.

下：解剖学実習室.

かったことを考え合わせると、慈恵医学校はすでに設備も教授陣も抜群であったことを示すものである」と。

この酒井氏の指摘はたしかに当たっていたのであろう。兼寛はその昇格後もますます基礎医学的教育施設の拡充に努力していくのである。したがってこれはむしろ兼寛の本来の医学教育の哲学であったと考えるべきであろう。

5. 東京慈恵医院医学校に接して私設・東京病院を開院

兼寛は帰国いらい貧しい庶民のための医療に情熱を傾けてきたわけであるが、外務卿（大臣）・井上馨が「このたび高木兼寛なるものが英国の留学を終えて、しかも優等の成績をもって帰朝した。ついては万一同氏の診察を請わんと欲するならば、遠慮なく本省までお申出で相成らば便宜を与える」と云って宣伝してくれたこともあって、上流階級からの診療を希望する者も日増しに増えていった。兼寛はこれに応じて「病苦を告ぐる者はすべて放置すべからず」という決意で、私設の病院を建設した。すなわち東京慈恵医院医学校に隣接する土地（愛宕町2丁目、三菱所有の250坪）を賃借して、最新式の病院、東京病院を新築したのである（明治23年（1890））（写真11）。（この病院は単なる私設病院であるが、それをここに記載した理由は、後述するように東京慈恵医院医学専門学校が医科大学に昇格するとき（大正10年（1921））この病院がそのまま大学の付属病院に提供されたからである）。

記録によると設立当時の病院は「病院の正面玄関から入って右側に応接室、事務会計室および薬局があり、左側に患者控所あり、突き当たりを診察所、その奥まった所に外科手術場を設けた。手術場は防腐的な留意が周到に施され、手術傍観席との間は玻璃窓で隔離されていた。診察所の隣に機械室、浴室があり、病室は階下第1号より第16号、階上が第17号より第41号になっていた。その間程良い所に看護婦室を配置してあった」という。

設立当時の建物は、図1の21（診察室・病室（1階）・看護婦室（2階））、22

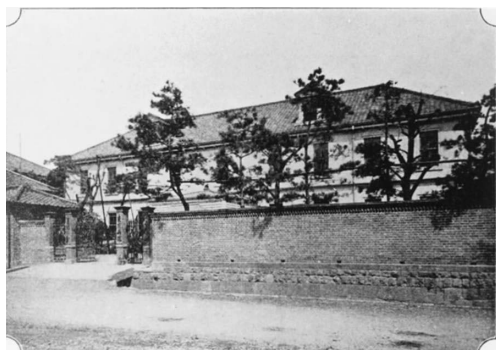


写真 11. 東京病院 (21-32).

上：東南方向から東京病院正面を写す。

下：西南方向から東京慈恵医院医学専門学校 (1, 2) と東京病院を見る。最も近い左手前の建物が成医会事務所 (4)、向こうに東京病院の手術室 (25) と診察所・病室 (24) が見える。

(病室 (1 階) (2 階)・看護婦室 (3 階)), 23 (薬局), 24 (診察室 (1 階)・病室 (2 階)), 25 (手術室), 26 (病室 (1 階) (2 階)) などを含む南半分 (延坪 365 坪) のみであったと思われる。そしてここに 40 室ばかりの病室 (主に個室) があったのである。この病院の病室はすべて畳敷であり、しかも戸棚、食膳、掛物の釘にいたるまで、患者の好みや便宜を最大に考慮していたといわれる。

病院はその後ますます拡張を続け、諸科を増設し、また人材を補強していっ

た(この図の北半分に広がる建物はすべてその後の増改築である)。そして大正10年10月、医学校が医科大学(東京慈恵会医科大学)に昇格するときは、大学に提供され、付属病院に組織替えされた。提供されたときの規模は、図1のそれに近い建坪844坪、延坪1,374坪、病室113室であったと思われる。(医科大学は当然付属病院をもつべきであったが、東京慈恵会医院はむしろ医学校の上部構造であったため付属病院にすることはできず、東京病院の院長・高木喜寛の英断によってこのようなかたちになったのであった)。

この東京病院の発足に当たって、兼寛は1つの理想をこころみた。それは医薬分業の実践であった。英国留学中の見聞から、兼寛はわが国においても1日も早く医薬分業の形態をとるべきであると考え、まず自らがその先駆けとなったのである。そのため福原有信の経営する資生堂に病院の薬局を全面的に任せたのであった(つまり資生堂薬局の支局にしたのである)。

しかし、せっかくの兼寛の医薬分業の実践も、資生堂の福原がそれに専念することができず、途中で挫折したため、僅かの期間でこのことは取りやめとなった(資生堂は薬局を止め、化粧品に専念することになったのである)。

それにしてもこの東京病院において医薬分業の実践が試みられたことは、医学・薬学史から見てもきわめて画期的出来事であった。

また看護婦に毎月2回仏教法話を聞かせたり、病院内に神棚と仏壇を作らせ、毎朝、看護婦や入院患者に参拝させたこともこの病院の特徴であったと言えるであろう。

6. 東京慈恵会の設立と大学昇格への研究施設拡充

東京慈恵医院は、患者が増加するにしたがって運営はふたたび困難になってきたので、病院は再度改組して、今度は華族、実業家が参加する社団法人をつくり、これが病院の運営にあたることになった。すなわち社団法人・東京慈恵会の誕生である(明治40年(1907)7月)。病院名も東京慈恵会医院と



写真 12. 東京慈恵会医院医学専門学校 病理学・細菌学教室 (12, 13).

上: 全景, 東南方向から写す.

中: ここで行われる細菌学実習.

下: 南門側の景色. 左手前に図書館 (7), その奥に校舎 (9, 10, 11), 右奥に病理学・細菌学教室 (12, 13) の建物が見える.



写真 13. 東京慈恵会医院医学専門学校 病理解剖室 (14)。

なり、医学校も東京慈恵会医院医学専門学校に改められた。

この改革によって慈恵会医院の運営はかなり楽になったため、ふたたび基礎医学的研究・教育施設の拡充が可能になった。まず明治 44 年 4 月、図中 12 (病理学・細菌学実習室, 病理学教室(2 階)), 13 (講義室, 細菌学教室(2 階)) が新築された。建物全体は 2 階建て、延 160 坪であるが、とくに採光, 通風に考慮し、顕微鏡観察に支障のないように設計されていた(当時としては最も近代的施設として注目された)。医学校の南門を入って右手に見える立派な近代的建物がそれである(写真 12. 上下)。大学昇格へ準備が始められたと考えるべきであろう。この建物の後方(西側)にはさらに 14 (病理解剖室) が別の建物として新築された(写真 13)。(細菌学関係は綿引朝光教授, 病理学関係は今 裕教授によって活用された)。

またこの建物の南には、大正天皇の即位を記念して、15 の御大典祈念館が新築された(大正 5 年(1916) 6 月)(写真 14)。鉄筋コンクリート 3 階建て、建坪 55 坪(延坪 169 坪余)で、解剖標本, 病理標本の陳列所として使用され



写真 14. 御大典記念館 (15)。

この建物の右奥に病理学・細菌学教室の建物が見える。

た。その後、1 階は図書部が使用し、関東大震災（大正 12 年 9 月）の折りには、その 1 階は消失したが、2 階、3 階の標本は無傷で難を遁れた。

有栖川宮家より慈恵会医院にご下賜金があったのを機に、慈恵会医院の北側の廊下つづきに研究所の建設が進められ、大正 10 年 9 月に落成した。その建物 (20) は木骨鉄網塗込 2 階建て（動物室 (19) は平屋）、建坪 151 坪、延坪 249 坪で、かなり大きなものであった（写真 15. 上）。内部は生理部、組織部、医化学部、病理部、細菌部、血清部などの各部よりなり、設備としては天秤室、乾燥室、ザイテンガルバノメーター室、臨床的ガス熱量測定室、健康動物室、病的動物室などの最新の設備が揃っていた。ここには浦本政三郎、森田斉次、永山武美ら各教授の実験室、各部の研究生の実験室が置かれていた。医化学はすでに明治 41 年に他の医学部、医学専門学校に先んじて講座が新設されていた（写真 15. 下）。

同研究所はその目的として「疾病に関する科学研究を遂げ、その病因を簡明にし、これが診断、治療、予防の策を攻究し、且つ各研究生の指導をなす」を掲げていた。これはまさに兼寛の医学哲学そのものであった。

翌年、同研究所に臨床検査部が新設されて、一般医師、病院などから依頼された検査物について、細菌学、衛生学、医化学および病理学の範囲で検査



写真 15. 東京慈恵会医科大学 研究所 (20).

上：全景。北東方向から写す。手前に動物室 (19) が見える。
下：同研究所の医化学研究室。手前に立てるは永山武美教授。

を行うことになった。

同研究所は、大学昇格後は、その管理運営が慈恵会医院から大学に託され、大学付属研究所になった (大正 12 年 2 月)。

研究所新設に少しおくれて、今度は運動場の西側、御大典記念館の東側に、16 (医化学実習室、組織学実習室、大講堂 (2 階)) が新築された。そして中に、医化学、組織学の教授室、教室員の実験室がおかれた。図から概算して建坪 100 余坪にもなるかなり大きいものであるが、その建設時期が大震災に近かったためか、写真がまったく残っていない。

兼寛は、東京慈恵会医院医学専門学校が大学に昇格する大正 10 年 10 月の

直前（大正9年4月13日）に逝去した。大学昇格をみることなく他界したことは誠に残念であった。

この研究所（20）は、その位置関係からいって、東京慈恵会医院の施設として立案されたものと思われるが、一方、その研究を実際に遂行するのは東京慈恵会医院医学専門学校の基礎医学者たちであったから、この立案計画に彼らの意向が強く反映したことは当然考えられる。またこの立案計画には、最晩年の兼寛の意向も十分生かされていたと推測される。

兼寛はもともと臨床医の基礎医学的研究を好まなかった。その理由は「臨床医家には病者を救う研究こそが本義であり、学理的研究の要があれば、それぞれの基礎医学者の指導の下になさるべきである」というのが主意であった。臨床の現場から生まれた問題であっても、基礎医学的問題については基礎医学者の協力の下に行うべきであるというのである。

この研究所の目的、組織をみると、兼寛のこの意向がそのまま生かされていたことがよく分かる。しかも落成の翌年に、臨床医から提出された試料を調べる検査科が増設されて基礎医学者が関与しているのを見ると、その感を一層深くするのである。現在の大学中央検査室の設立は昭和34年であるから、その40年も前に酷似の組織ができていたことは驚くべきことである。

7. 東京慈恵医院医学専門学校は医科大学に昇格、 東京病院を付属病院に、 そして間もなく関東大震災に

このようにひたすら発展の道を歩み続けてきた東京慈恵会医院医学専門学校は、大正10年（1921）10月、ようやく東京慈恵会医科大学（財団法人）に昇格した。そして先述のように東京病院を付属病院にして、私立医科大学の新しい道を走り始めた。しかしこの医科大学は、そのわずか1年11ヶ月後に、関東大震災によってすべてを灰燼に帰すのである。



写真 16. 関東大震災による惨状。

上：第3号病棟(L)の焼け跡から焼け残った御大典記念館(15)と外殻だけになった看護婦教育所(P)を見る。

中：第1号病棟(G)と第2号病棟(H)のつなぎ目付近の惨状。

下：南門を通してみる惨状。建物としては記念館が見えるだけ。はるか向こうに第1、第2病棟(G、H)の残骸がみえる。写真12.下と対比すべき写真。

大正12年9月1日、午前11時58分の大地震(マグニチュード7.9)で、慈恵会医院の第2号病棟(H)の一部が倒壊した。しかしその他の建物は何とかこれに耐えることができた。またこの地震で生理学教室(5)から出火したが、これも直ちに消火され、一応学内の火災はくい止めることができた。ところが午後11時頃になって、外部からの猛火はついに学園周辺に迫り、翌2日午前2時頃までの間に、大学の校舎・研究所・付属病院・東京慈恵会医院の建物・設備・器具・機械・図書など悉く灰燼に帰してしまったのである。そしてわずかに鉄筋コンクリート建ての御大典記念館(15)(とその2,3階に収蔵されていた解剖と病理の標本)だけが残ったのであった(写真16)。

10月20日、荒涼たる廃墟の運動場らしきところに(図参照)、学長(金杉英五郎)以下教職員、学生すべてが集まり、悲壮な始業式が行われた。その式辞で学長は「宜しく天の試練に耐え忍び、校舎、設備悉く焼け失せたりと雖も、慈恵学園40余年の伝統と精華は聊かなりとも揺るぎはせぬ。学長以下当事者は、今や鋭意復興に努めつつある」と述べて、全員の奮起を促すとともに、自らの決意を披瀝した。一同は涙とともに東京慈恵会医科大学万歳を唱えて、復興の意気を一層高揚したといわれる。